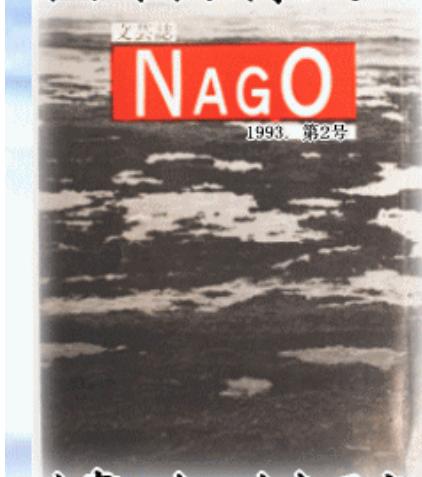




昔の書類を捜していたら何と18年前に書いた拙文が見つかりました。管理栄養士として病棟の患者さんのベッドサイドに伺っていた時の感じた思いでした。



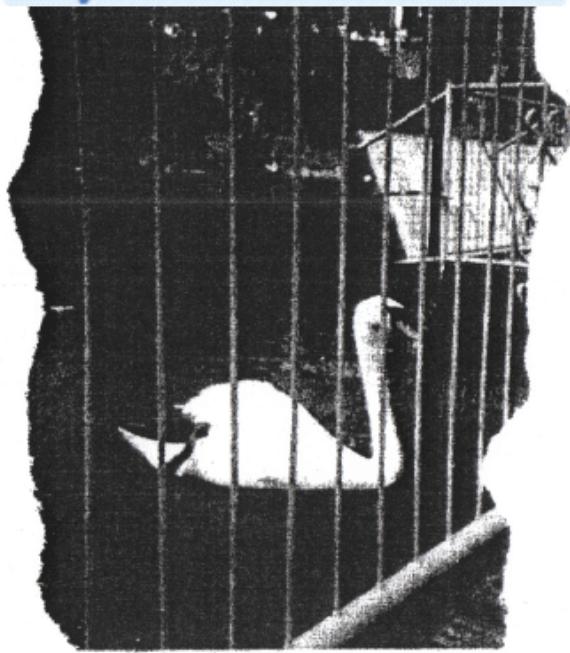
35年前八重山に住んで子育てしていた頃、昔ながらの瓦屋で住む多くの高齢者と8年間のお付き合いをさせて頂きました。一番座や二番座、裏座の話を聞いたのもその頃でした。そして、病棟に暮らす高齢者の方々のお話を聞くうちに、見舞いに訪れようとしない子供達の有様や老婆の寂しさを表現したく書いたつもりです。当時、琉球新報に投稿したものやはりの落選でした。名護のお友達が紹介してくれたこの文芸誌に出させて貰ったわけです。
忘れていた昔のつたない文章を読んで頂けますか？

2011年5月 事務長 藤本孝子

仏桑華

あかばなあ

藤本孝子



私の名は崎浜ウシ。

遠い昔のもう八十年も前のこと、つい昨日の出来事のように思い出しているのですよ。この狭い裏座で、長女のヤスや長男の一男、二男の安男、次女のウタ、三女のミツ、四女のマサを産んだ日のことを。

どの子のお産も難産だったア。特に長女のヤスの時など、陣痛が三日も続き、痛んでは遠のき、痛んでは遠のきして、近くの年寄りのカマドオバアは、お腹をさすりながらこう言つたさ。

「もう腹の中のこの子はダメになるかもしないぞ。覚悟しとけ。」と。しかし、また、そう言いながらも、「産むしかないんだよ。どうやっても産むんだぞー」と、

水を口に含ませてくれながら、痛む腰をさすり続けてくれたんだよね。長い長い三日間だった。突然、堰を切ったように激しい陣痛がおそい、私はハアハア言いながら、天井からつるされたひもを、ちぎれんばかりに引っ張り、力の限り息んだんだ。カマドオバアは、

「頭が見えたぞ、あと一息だよ。そのまま頑張るんだ。」と、

もう死ぬほど痛がっている私のほっぺたを、叩きながら励ましてくれたのさ。もう少しもう少しど、息たえだえに更に強く力を入れて息んだ時、スルッと生温かいものが私の太股の所に触れた。スッ！と痛みが消えたさア。





カマドオバアが、

「よくやった、よくやった、まるまる太った女の子ですよ。」と言つてくれた。

ああ 赤ん坊を産んだんだ。産むってことはこんなに苦しいものだけど、私が産んだんだ。子供を産めたんだ。

と思っていると又腹が痛んだ。カマドオバアが、

「もう一回息んでみろ。胎盤が出るのさ。」と教えてくれた。

軽く息んだ。

後産がうまく終わると、もう疲れていた私は、そのまま眠ってしまった。ペシャンコになつた腹を手で押さえながらね。

目が覚めると、夫の玉男もオジイもオバアも、よくやつた、と一言も言わず、

「次は長男を産め！」と言つたきりだった。

私はおかげをすりながら、涙が出ていたさア。女はこうやって死に目に会いながら、苦労して赤ん坊を産むものなんだ。それにしても家族の誰も、女を産んだ私を誉めてはくれないんだなアと。私は乳を飲ませながら、裏座で一人泣いていたサ。

そうやって何度も痛い思いをして六人の子供をこの裏座で産んできたんだよ。昨日の事のように思い出されるけど、ほんともう昔のことなんだよ。

私はもう九十九才になってしまった。

この裏座で、このまま死んで行くんだろうか。私の身体は床ずれの為に、肩にも、尻にも背中にも足にも真黒い褥瘡が出来て、痛くて動くこともできないさ。

もう長ーいこと身体も洗っていない。誰でもいい。三日に一度でいいから体をふいてくれないかい。

一日に一度でもいいから体の向きを変えてはくれまいか。ヤスでもいい。ウタでもミツでもマサでもいい。一男の嫁のシゲでも、二男の嫁のフミでもいいのだ。

誰も私の事など忘れているのだろう。

日に一度、おかげを持って来てくれる時、お願ひだか

ら向きをかえてくれないか。体の床ずれが少しは良くな

ると思うんだが。

私がお前達を産んだ時、いつもあせもができないよう

に、おむつかぶれができないようにと、体をふいたよう

に、体をふいておくれ。私の下の始末は日に一度やつてくれるだけでも有難いことだよ。日に一度のおかゆと水しか飲まぬのに、出るものは出るんだよ。迷惑をかけ申し訳ないね。もうすぐさ。お迎えが来るのは。それまで世話をかけるが、私の望みは一つだけだよ。この痛い床ずれがどうにかならぬものだろうか。食べなくたつていよい。食べなきや下から出るのも少なくなるんだから。それのご先祖様の所へ早目に行けるだろうからね。

この悪臭、吐き気のするようなこの私の体の臭い。お





——この私がボケてるって？ とんでもない。話しも

したくないほどお前らに失望したんだよ。笑わないと、あたりまえさ。笑おうたって何を笑えばいい？ 体が痛くてズキズキしている。この痛みで笑うことなどできるものか。

私に話しかけてきた。その先生はみるからに純朴そうで心根のやさしそうな人にみえた。

「オバア、わかるか？ 大丈夫だよ。さあ今日は体を診てみよう。長いこと寝たきりだって？ やせてるなア。食べるか？ 食べて元気をだして、又孫の顔でも見に出掛けんとな。」

と、しゃべりながら私の寝巻きをはがしていった。

「こりゃすごい！！ 植瘓だらけじゃないか」「ほんとに。えーっ。こんなにひどいの初めてです。」「すぐ入院だな。」

「先生、ベッドの空きがあるでしょうか？」

「大丈夫。僕が頼んでみる。これはすぐ入院しないとダメだ。栄養失調と褥瘻で、かなり危険だな。」
と、保健婦さんと先生がびっくりしながら話し合っていた。

——病院に行ける。この体の痛みを何とかしてくれるか

もしれない。

先生は神様だ。

私はボケてなどいないのですよ。でも今は何も言わない。病院に行ってからだ。やはり私は栄養失調になってしまっているんだ。そりやそうさ。この一年一日一回の少ーしのおかゆだけだからなア。とにかく体の痛みをとってくれる所なら、どこにでも行くさ。

「オバアを入院させましょう。このままだと、命にかかるから。病院は本部にしつかりした病院がありますし、そこへ頼んであげるから。すぐ準備しなさい。」
と、先生が嫁のシゲに告げた。

「家族の人達とよく話し合ってすぐに入院するようにしない。明日にでも病院の救急車をまわしてもらいますからね。」

翌日本部の病院の救急車が私を助けに来てくれたさ。先生と一緒に男の人が二人この裏座へ入つて来た。どんな反応するんだろうとそーっと見ていたら

「うわアーひどいな この臭い。」

「臭い臭い。」
「オバアひどくやせてるな。骨と皮じゃないか。」



「私がボケていると思つてゐるからこの一人は日々に思つたことを言つてゐる。そりやあそうだ。私の布団も寝巻きも寝たきりになつた時からそのままだからよ。くさいはずだ。」

「氣をつけて運んでよね。体中褥瘡だらけだから。」と、先生が言つてゐる。

「軽いなア。何も食べてないんぢやないですかこのオバアは。」と、若い方の病院職員が言つてゐる。

「そのとうりさ。

「それでも家族はいるんでしょう。表の座敷はこんなにきれいに掃除してある。大事な親をよくもこんな汚い部屋に寝かせていたものだ。」と、五十代の男性がため息つきながら話している。

こうして私は本部にあるりっぱな病院に連れて行かれた。

私が病室に運び込まれると、太った人の良さそうな先生や看護婦さんが多勢私の回りに集まつて來た。私は目をつむっていた。

「このオバア一人暮しだったの？」
「家族はいないの？」
「汚れてる！」

「臭い！」

「すごい悪臭だ。」と日々に言い合つてゐる。ともかく汚れた着物をはぎとられたさ。

「ウワーアッ」という声があがつた。きっと私の体の傷—褥瘡のことを驚いてゐるに違ひない。それだけではない。黒いあかまみれの体もだらう。

「すごい褥瘡！」

「こんなの初めて見るワ」

「このみみずのように線になつてゐるのは汚れなんだ。」

「このオバア何年間も風呂に入れてもらつてないわネ。」

「体も拭いてくれる家族がいなかつたはずだわ。」

「それでもこの臭い。ひどいね。ひどいよ。」

看護婦達が次々と近寄つては私を見て言つた。

私はそつと目を開けて周囲を見た。

私と同じ様な年のオジイやオバアがベッドに横たわっていた。皆それでも一応落ち着いた顔付きで眠つていた。ベッドで横になつていた。それぞれの病人には家政婦さんが付いていて、家族の人が看病している人は居なかつた。そうか他人に親切にしてもらおうという訳か。金を払つてな。と私は思った。でも私は誰が面倒みててくれるのだろう。一日中、大便や小便をとり替えてくれるのは私の場合嫁のシゲなのだろうか？と、不安だつた。



そんな事を考へているうちに病院の看護婦さんが手当てをしにきてくれた。やさしい看護婦さんで澄子さんと言つてた。

「オバア解る？ 私が解る？ オバア痛かったでしょうこの傷。体中にできるよ。体を先にきれいに拭いてから手当しようね。」って。

私は語りかけるように言つてくれた。私は澄子さんの目を見てうなづいた。

私は初めて自分の意思表示をしたさ。初めてというより久しぶりだね。何年ぶりだろう。人の目を見てうなづいたのは。

「ああオバア私の言つてることわかるのね。何もわからぬ、ボケてるなんて家族の人は言つてたけど。」

—— そう澄子さん、アナタの言つている事全部理解できますよ。

「つらかったわネ。こんな体で。体も洗つてもらわなかつた？ おしめも日に何度もかえてないでしょ？」

私はほんとうに久しぶりに素直な気持ちで「ウン」とうなづいてみせた。

「何か食べてたの？ この体ではほとんど食べていなかつたのね。あとで栄養士さんと相談して何か持つて来てもらいましょう。」

と、私の身体を温かいタオルで拭きながらやさしく声

をかけてくれた。人々の人間らしい会話。やさしい言葉。何年ぶりだろう。こんな安心した気分になつたのは。このところ家族はもう私の家族ではなかつた。私の子供らと顔を見つめて話すことなど絶えて久しくしてない。やさしい気持ちはもうほとんど残つていなくて、自分のこの体をのろばかりで、子供らは赤の他人様より冷たく、憎々しい人間のように思えていたから……。

家族つて何だろ？ 腹を痛めて産んだ子供が何だって言うんだろうね。肉親とか血を分けたとかっていう家族はもう私の様な、役立たずの老人には関係がないとうのかね。

若い時分から六人の子供を必死で養つてきた。食い物に困る時だつてあつたさ。畑からやっと芋を掘り出して、道端から草を取つてきては炊いて食べさせたのも子供を育てる為だった。我が子を生きさせることに必死だったのさ。子供らがスクスクと育つてくれて、私の体より大きくなつた時うれしかつたさ。

一男よ。お前は頭も良くて勉強もよくできたさ。字も読めぬ字も書けぬ私の子供かと思うほど、よくできて学校の先生に誉められるのが母ちゃんの何より幸わせな時だつたか。一生懸命きびを作り、海で魚を取つては売り高校遠出したんだ。りっぱな長男になつてくれたといつて父ちゃんと喜こんだものさ。

ヤス、安男、ウタよ。お前達は上の学校へはやれなかつ

たけど、気だての良い子に育ってくれたものだとうれしかったさ。お前達が働いてくれたおかげでミツやマサを学校へやれたさ。ミツやマツは手仕事が上手だったから美容師になって、母ちゃんの頭もきれいにしてくれた。

有難當よ。その頃が一番幸わせだったなあ。

「母ちゃんいつまでも元氣で、畠仕事や孫の世話をしてもよね」と、よく言つてくれていたさ。私もずーっと元氣で、死ぬまで元氣で、孫と遊びながら年をとつて、あの世に行く迄、楽しく話をしていたかった。

いつからこうなったんだ。自分が悪いのさ。こんなに役にも立たぬ年寄りになつて、お前らに迷惑ばかりかけたよ。でもさみしいものさ。ああやつて育てて来た子供らが、親を親とも思つちゃいねえ大人になるんだからな。悲しいことだよ。嗚々…。

なんて考へているうちに看護婦さんがきれいに私の体を拭いてくれた。何だか軽くなつたような気分だ。でもまだ臭うこの体。
そりやそうさ。何年もの垢がたまつてゐるんだ。一回や二回の身体拭きでそう簡単に、積もり積もった垢がそれるわけないさ。でも、有難當よ。澄子さん。嫁だって娘だつて臭い、きたないといつてさわつてくれたなかつたこのオバアの体をやさしく拭いてくれたね。痛い痛い褥瘡の回りはことさらていねいに取り扱つてくれてよ。

「オバア、栄養をいっぱいとつて、ゆっくり眠つて、傷の手当を毎日したらすぐ治るから…。」と、澄子さん。「注射もしてもらいましょうね先生に。」

私はただただ感謝でうなづくだけだったさ。そうしているうちに栄養士の先生も病室に来てくれたさ。「ウシオバアこんにちわー」というなり少し顔をしかめた。

「栄養失調と前代未聞の褥瘡ですって？」

と、看護婦さんに話かけると、

「見えてみますか。？」と、私の背中や尻の褥瘡を見せた。

「え!!ひどい。こんなひどいの初めてだわ。」

ともうあとは声にならなかつた。

「オバア私の言うことを理解できるかしら?」

「ええ大丈夫です。家族の方はボケていいと言つてます
が、解るようですよ。」

そう聞くと私に聞いかけてきた。

「オバア、ウシオバア何を食べてたの？　おかゆ？　アチビー？」

私は栄養士さんを見て、しっかりと目を見て「ウン」と首をたてにふつた。

「その他には？　おかずは食べたの？」

私は首を横に振つた。

そりや食べようと思えば食べれたかもしれない。でも

長いこと口にはしていない。おかゆの他には食べれないだろうと言つて嫁は私の為のおかずを作ることは忘れていたさ。

もう少し分前のことさ。トーフチャンプルーや魚のおつゆを食べたのは。

私は要求はしなかった。食べればその分、下から出るものは多くなるし、その度におしめを替えてくれる者がいるわけではなかったから。おかゆだけでも、もらえたのでも有難いと思わなくてはね。

「ひどい栄養失調ね。長い事栄養補給されていないようだわ。この様子だと、飲み込む力あるかわからないけれど、流動食を出してみましょう。」と栄養士が言つてくれた。

——有難当よ。何でもいいさ。食べれるものなら。

「早目に高カロリーにもって行かないで、梅瘡が治らないうわね。食べ方を見てどんどんアップしていましょう。」

親切な人ばかりさ、この病院の人は。私がボケているなどと言う人は一人もない。

「オバア、ちゃんと解るのネ。私達の言うこと理解してる。余計に氣の毒だったと思う。頭はしっかりしているのに思うように体も動かず、家族がボケ老人扱いしていたとしたら……。」と、フッとため息をもらすよ

うにその栄養士さんが言いながら、部屋を出て行った。私は食べれなかつた。せっかくのおいしそうな食事が。のどを落ちないんだよ。食べ易いように料理しているところに…。長いこと食べることを放棄したように、おかゆを、ほんとに少ーしのわかゆをすするようにしていった習慣が、私の食べる事を忘れさせてしまったんだなア。スプレーで三さじ四さじほどでもうダメさ。やつとこれだけさ。たくさん食べて早く元気になつて、この青黒い梅瘡を治そうと言つてくれたのに。

ごめんよ。食べれない。

でも先生は一刻も早く栄養補給しなければ私はダメになりそつて言ってる。あせつてるよ。私の頭は食べたいと願つても、この体が、この口がのどが、ということを聞いてくれない。

人の良さそうな先生が診察に廻つて来て、

「オバア食べたか？ 食事」と、聞いてくれた。

——ウン。と笑つたつもりで答えた。

看護婦さんと何やら話していたけど先生は、

「オバア鼻から管を通して栄養を入れよう。早く元気になれるし、梅瘡も早く治るから。」と、言った。

鼻から細い管を胃迄入れて、その管から栄養をとる鼻腔栄養とやらが始まった。そういうば暁のオバアもその隣のオバアもそんなものを鼻にしているなア。動きもしらないそのオバア達と私は結局同じ状態なんだ。頭だけは

しつかりしているつもりでも、やっぱりこの体ではネエ。先生におまかせすることにした。朝昼夕と白い濁った液体を鼻から流し始めたさ。これで元気になれるのなら何でもしてもらおうと思った。痛い痛い傷も徐々に良くなるはずだし。

こうやって四～五日過ぎたさ。私の体は毎日二回、家族が頼んだらしい家政婦さんがきれいに拭いてくれる。それにおしめも下から出る度に取り換えてくれて、体が日に日にきれいになる気がした。そういうえば自分でも鼻についていたイヤな臭いがしなくなつた。尻の傷も背中の傷も、看護婦さんが毎日、ていねいに消毒してくれて痛みが軽くなった。ほんとに皆親切でやさしい。有難当。少しづつ少しづつ人間らしくなっていく気がした。元気がでてきたせいかもしれない。鼻腔栄養のせいだろうか。でも、それにしても、この鼻からのチューブ、元気になれるだろうと思うからがまんもできるやり方だけど、これが長いこと続いたらまたもんじやないとと思うよ。この病室には私みたいな人が多いさ。隣のオバアもオジイもこんな白い液体で何年も生きているみたいさ。こんなにして生きている事が、ほんとうに生きているのかと思つたさ。ベッドに寝たきりで、話しもできない、笑いもしない、それに好きな黒ザーテーさえも食べることのできない人間なんて生きてるって言えないさ。どんなに長命だ、一〇〇才だとおだてられても、これは生き

てるなんてもんじやない。管が鼻から入り、奇妙な顔さ。氣の毒だよなと思ったさ。自分もそうだというのに。私はこの鼻瘡が治る頃には食事を食べられるのだから!! とまるで他人ごとのように隣のオバアのことを見ている。あの長いこと入院しているオバアやオジイは何を考えているんだろうとふつと思つた。私の様に体だけが不由で頭はしつかりとしているのだろうか。それとももう、とっくの昔にボケてしまつてゐるのやら? 頭の中は真白で何も考えられないのだろうか。そんなはずはない。私だって体こそ自分のものではない氣がするけど、頭の中は刻々と動いてゐるんだもの。

若い頃の事を思い出してゐるんだろうか。三味線ひいて、歌つて踊つた樂しかつた昔の事を考へてゐるのかね。それとも暑い日中に烟の草取りをしていた事をだろ? かきびが立派にできて、そのきびを売つて子供を学校に出した時のことだろうか。狭い台所で夫や子供の為に食事を作つたことを思い出しているんだろうか? 私のようになに……。

それとしても人間の体つてのは、やつかいなもんさ。こんな白い液体を牛乳パック一本分程度流し込むだけでも大便や小便が毎日出てくる。人様の手をわざわざしてしか處理できない。あのオバアやオジイも最初はどんなに恥ずかしい思いをしたんだろうか。こんな屈辱的で恥ずかしいことつてないものだよね。若い元気な人にはわか

らんさ。嫁に毎日下の世話をやつてもらうことの苦しさは経験した人にしかわからんものさ。全く他人の看護婦さんや家政婦さんにおまかせする方が気が楽な事も知った。初めての時は、もう恥ずかしくて、この動かない手を一生懸命動かして、あそこを隠そうとしたさ。なかなかこの恥ずかしさは、慣れるものではなくて、毎回顔から火が出るほどだった。でも、おまかせできると思った途端、他人であるほど事務的になれることがわかったさ。親戚よりは近くの他人なんて言葉もあつたけど、血よりも金かと思ってしまうよね。さびしいーねー。」

金でほんと全ての事が片づく世の中ってのは、私のようなオバアには悲しいさ。金がなくたって私の産んだ子供や嫁や孫に囲まれて、一緒にテレビを見て、笑い、泣き、隣のオジイがどうしたとか、隣のオバアがどうしているとか、話をしてくれるのが幸わせというものです。

人の寿命が長くなつて、世界一の長寿県だと自慢するけど、その中の一体何人の年寄りが、ほんとに長生きしていく良かったたと思ってるんだろうか。

病院で生き長らえている人を見ても、幸わせそうな顔をした人は一人も居そろはないじゃないか。皆ベッドの上で思うことは一つさ。

どうしてこんなになる迄生きてしまつたんだろうか? つてさ。年をとるつてことが、こんなにさみしく、悲しいほどみじめだってこと、人間なら、いつか誰もがそ

の道を通るはずだから、その時うちあたいするはずだよ。母親の胎内から赤ん坊として生れ、何も怖くない、生きることの希望だけのある若者となり、年をとることが少しづつ解るようになる中年をすぎ、自分だけは年をとらないんだと思っていたことを忘れ、年をとる怖さや、老いへの影を見るようになる六十代七十年代へと、誰もが通る道さ。

「やスや一男、ウタ、シゲお前らだつていつかこの自分の様になる時が来るんだぞ。忘れちゃいけないよ。人間は年をとるつてことを。

もう私はお前らを恨みはない。

恨んだところで、私が若い時に、元気な頃に戻れるつて訳でもないからな。人間という生き物が、どんなに悲しいものか、誰もが知る日が必ずあるんだよ。

「ウタオバア、ウタオバア」と呼ぶ看護婦さんの声で目が覚めた。長いこと気持ちよく眠っていた気がする。入院してもう二週間が過ぎた。体のあちこちにある褥瘡の痛みも大部和らいだ気がする。よごれていた体も毎日の清拭でほんとにきれいになつた。イヤーな臭いもとれた。看護婦さん先生、家政婦さん有難當よ。人間らしい体になつたんで、こんなによく眠れるようになったんだよ。

「オバア気分はどう?」

「先生の診察よ。目を開けて。顔をよくみせてよ。」

人の良さそうな先生が来た。

「オバア少しづつ元気になってるな。この調子だと口からおいしいのが食べられるぞ。頑張るんだよ。気を強くもってな。」

先生が体をさすりながら話しかけてくれたさ。

——えええ、有難当、頑張るさ。元気になれそうな気がする。もうひとふんばかりして一〇〇才も一〇〇才も生きるさ。

人ってのはやっぱり会話をしないとな。楽しい会話を誰でもいい。話すのが一番の幸わせ。年寄りにとつてはな。

不思議だ。力が湧いてくる。あの狭い裏座で生きたえていた時は、早くお迎えが来ないものかとそればかり考えていたのによ。生きているって事は、心臓が動いているって事だけじゃないことをつくづく思う。何が長寿だ。私は長寿の数に入れて欲しくない。私がほんとうに元気になって、体が動かせて、家族の為に役に立ち始めた時、私は長寿の仲間入りをさせてもらおう。

生きるって事は難しい。ほんとうに生きるって人はほんの一握りの人だって、しみじみと思うさ。先生や看護婦さんの声は有難い。

家族の者は昨日も今日も来なかった。私のことなど忘れてしまつたのかもしれない。このまま忘れてしまうだろう。私も家族の事など忘れよう。眠ろう。

長いこと、今迄にないほど眠った。

私の周りが騒々しかった。

薄日をあけて見る。先生が私の胸に聴診器をあてている。看護婦さんが血圧を測っている。どうしたんだ。どうして皆みんなにあせっているんだろ。私は気持ちがいいのに。背中や尻や肩の褥瘡の痛みが全然感じられない。長いこと眠っている間に治ってしまったのだろうか。そんなバカなこともあるまい。頭の中が白い感じがする。いい気持ちだ。痛みなんかない。このままジーッと眠っていていい。誰も私を起こさないで。沈むように落ちるようにこのままでいたい。それでも背中は何故かスースーする。薄ら寒い感じだ。でもあの青黒い褥瘡が痛むのとは違う。嗚々、頭がフワーッとしている。

看護婦さんや先生の声が遠くなつた。
だんだん遠くへ遠くへこだまのように響く。

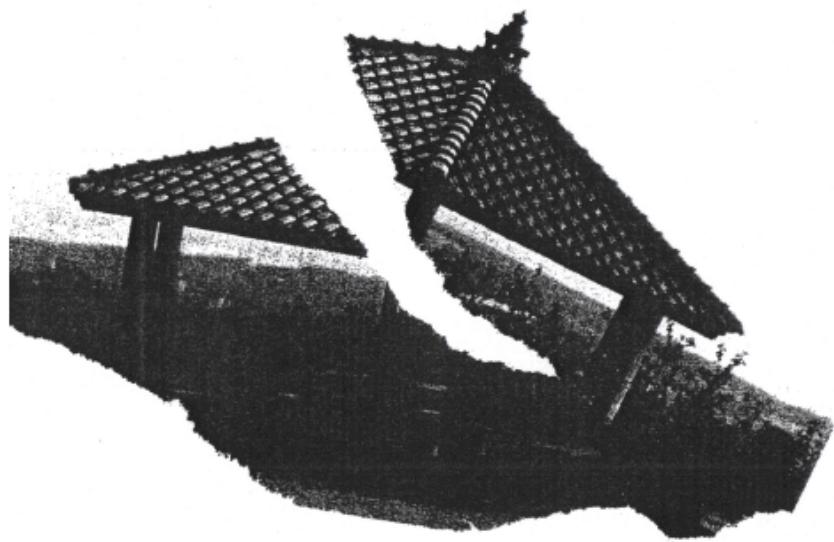
「ウシオバア、ウシオバア。」と呼んでいるようだ。
私は「ハイ！」と返事をしたつもりだった。
「ハイツ」つて。



「有難当。」

最後迄私は、息が途絶える迄、ウシオバアであること
がわかつていた。

—完—





前らを産んだはずのこの裏座の悪臭。いいんだよ。誰も

近寄りたくないのも解るさ。でもね、この部屋で産んだ
んだよお前らを。お前らの産まれたこの部屋で死んで行
くのは本望なんだよ。しかし、しかしだよ、私はいいけ
ど、この臭いどうにかならないかね。暗いねこの部屋は。

一度でいいからパアーッと開け放してくれないか。朝日
も見てみたい。外の仏桑花の赤い花も見たいよ。ヤス、
お前が小さかった頃、よく頭に飾ってやつたものだよ。

きれいな花嫁になりなよってネ、耳の脇にさしてやつた
あの仏桑花をね。もう手に取って花も折ることはないさ。
私の腕は動かす力もないんだもの。指は水ぶくれのよう
に腫れ、腕の肉も、腹の肉も、胸も足ももう肉はついて
いない。延びきった皮膚がダラリとたれさがって奇妙な
もんだよ。足は棒きれのようだ。

それでも生きているんだよ私は。まだ痛みが解るん
よ。この尻の床ずれが痛いんだ。お産の痛みどころじや
ない。毎日毎日ジクジクと青黒いものが大きくなりなっ
ているんだもの。痛いんだよ。息子にも娘にも嫁にも届
かないんだこの痛みが。一枚の戸を隔てた向こうの部屋
にいるはずの私の産んだ子供らに…。

シゲがヤスに電話している声が聞こえる。

「ヤスさん、たまにはオバアを見舞いに来たらどうで

すか。」

——忙しくて。アンタにはお世話をかけていますがね。
「臭いさ、オバアは。そりゃあ私がおしめをまめに取り

換えてはいますよ。食事もオバアの好きな物を日何
度か食べさせていますよ。それでも食欲がなくて痩せ
ていくばかりでよ。たまにはオバアの好きな砂糖菓子
でも持つて来てもバチはあたりませんがね。」

——今度の休みには必ず行くさ。その時にはオバア
の世話は私がしますから。

「ホントに、いつになつたらこのオバアの世話から解放
されるのかね。いくら私が、長男の嫁だと言つても、
娘がいっぱい居るのに月に一度も訪ねて来ないのはど
ういう訳ですかね。」

——すみませんネエ。

「頭のボケた、大便も小便もたれ流しのオバアを他人に
預けて、アンタら何とも思わないのかね。」

——近くなら毎日でも面倒を見に行くのですが……。
那覇からだとねえ。それに仕事もあるし……。

「私にだって私の生活もあるんですよ。いつも主人は朝
早く出たきり夜遅くまで帰つて来ない。私にはキビ畑
もバインもあるのにさ。オバアはこはんを持って行く
と、ボケているのに、ジーッと私を見るんですよ。悲
しそうなうらめしそうな目で。でも一言も物は言わな
いさ。もう言葉も忘れてるんじゃないですか。早目に



来ないとダメじゃないの？早く来た方がいいですよ。ただ、オバアの部屋はちょっと臭いけどよ。大便も小便もするんで臭いが抜けないさ。」

——ホントに申し訳ないですよ。今度行つた時、おしめとり換えたりしますから。

一方的に嫁のシゲが娘のヤスに愚痴っているのがウシには聞こえた。

私がボケているって？ とんでもない。私はボケていればどんなに幸わせだろうと思っているのに。この解りすぎる程解る頭の為に、私がどれだけ、悲しい思いをしているのか、子供達よお前らに解るか？

ボケていれば、私は自分が失禁する事も少しも恥ずかしいと思はしない。大便が出て、尻が気持ちが悪く、おしめを一日せめて二回程替えてくれる子供は居ないものかと、子供を責める気持ちも起らないはずだ。この自然に逆らえぬ生理現象を少しでも止めたいと思い、お前らが一日一度しか与えてくれぬおかゆさえも食べないでおこうかと思うこともある程なのだ。

ボケていたらどんなに私は幸わせだろうか。シゲやヤスの話を理解できぬ程ボケていたらこんな屈辱感を味わいもせず、どんなにみじめでない事だろう。私の頭はこれっぽっちもボケていないんだよ。お前らが話す一句一

句が、しかも襖を一枚隔てているが為に、余計に一人一人の感情が、本心が私には伝わってくる。子供らが年寄りの私一人の為にどんなに困り、迷惑がっているかが、心底伝わり、それが私の床ずれを一層ひどくしている事もはがゆいほど解るのだよ。

自分で動きたいさア。自分で便所にも行きたい。自分の食べるもの位、自分で作りたいさ。この裏座もきれいに掃除してみたい。何年も干した事のないこの布団も陽にあててみたい。花の一本も飾ってみたい。昔のように煙にも出たい。友達のナベにも会って、黒ザーテーを食べながらお茶を飲んでみたいさ。孫の陽子や新一とも話してみたいさ。何よりもこの体中にできた青黒い褥瘡を医者に診せて早く治したい。

ああ、この頭の中がグチャグチャとボケていたら、私は動けぬこんな体で考える事もなく幸わせなんだよ。元気で若かったあの頃のままボケていたら私は何と幸せ者だろうか。

目も耳も年相応に見えもせず、聞こえもしなければこんなめに会わずに済んだのによ。

長男の嫁のシゲが私の事をやっかいもののように心底憎たらしそうに私を一瞥して、日に一度おしめを換え、飯を持って来ては、私を足払いしていくのを見ることもないだろうに。汚れた寝巻きと布団も、ましてやこの黒く垢のよじれる程の自分の体を見なくて済むのだよ。

醜くたれさがった皮膚も、やせこけた棒のような足も手も見ないで済むのにさ。

耳だってどうしてこんなによく聞こえるんだろう。聞かなければどうって事もないはずなのに、自分の事で子供らが言い争っている事が全部私の中に入ってくるんだよ。

その度に、嗚々、長生きをするって事が、どんなにすごいことか、どんなにつらいことか、どんなに屈辱的な事か、骨身にしみて青黒い梅瘡がキリキリと痛むのさ。

この頭も目も耳もどうにかしてくれないか。神様よ。隣のナエオバアがまだ八十才の頃ボケて、食べてもまだ食事が済んでいないと言つて嫁に「飯も食わせねえのか！」と叫んでいたのが思い出される。息子だか嫁だかわからなくて、

「アンタ誰だ」

「アンタいい人だね。」

なんて言ひながら、ボケたままあの世に逝ったナエオバアは幸わせさ。

世の中人は、ボケは怖いよ、ボケないようにするはどうしたらいのかね、なんてよく言うけど、そりや体も元気で家の一つもできる人の場合だよ。私なんぞ、この動かぬ、何の役にも立たぬ体では、ボケてしまえばいいのにと心底思う。

子供の事もうらまず、嫁の事も憎まず、あの世に行ける手法があるとすれば、ボケが一番さ。

頭だけがしっかりと確かに、身動きできぬこの体、誰に文句を言へばいいのか？、誰を恨めばいいのだ？。おしめを替えてくれぬ嫁をか？、体の向きを変えてもくれぬ嫁を恨めしいと思つたところで、動けぬ寝たきりの私が悪いのさ。

どうしてこんなになってしまったんだろうね。九十九年も生きる事が悪いのさ。早く切り上げちまつて、平均寿命の八十六も生きた頃に、お迎えが欲しかったさ。

それにしても、私の住んでいるこの北部の村はよ、長寿村だの百寿の村だと、テレビや新聞でも、もてはやされ、えらい先生が何度も誉めて下さるけどよ、私のような動けぬ寝つきりのたれ流しの、体中梅瘡だらけの裏座で蹲づいている老人も、長寿の一人なのかよ。長寿がきいてあきれるよ。

体も頭も元気で、畑も作つて孫のアメの一つでも買ってやれる年寄りが、ホントの正真正銘の長寿さ。そうだろうえらい先生方よ。カジマヤーのお祝いもしてもらいたいと思つたア。しかしね、息子や嫁は

「あんなボケた、たれながしのオバアの為に金もかけんさ、なア。」と、台所で話しているのを聞いてあきらめたア。

何と理不尽なんだろう、長く生きるという事は。

それにしても傷が痛む。

誰か医者に連れて行ってくれないか。この青黒い傷さえ治れば、食事も食べなくてもいいさ。毎日水だけで、命のある限り、命の消える日迄、誰にもおしめなど替えてももらわないで、ひつそりとこの裏座で生きているさ。

身体が日に日に衰弱していくのが解ると反対に頭はさえわたっていくさ。

ある日突然、診療所の先生が村の保健婦さんと一緒に、私を診に来てくれた。巡回診療とかで、寝たきりの年寄りのいる所を訪ねてくれるのさ。先生と保健婦さんがこの裏座に入るや否や、「ウツ」と言って顔をしかめたのが解った。臭いのだ。悪臭に違いない。ずっとこの部屋にいる私は慣れっこになってしまっているけど、きっとこの二人にはがまんのできぬ悪臭に違いない。裏座の部屋をしみじみと見渡して二人は顔を見合せて、どうにもならんという顔をしていたさ。

「オバアは何年こうして寝たきりなのか？」

「もう三年になります。」

「食事は？」

「おかゆを少しづつ。」

「大便や小便はどうしているの？」

「おしめを替えています。日に四～五回」

——このうそつき、嫁のシゲメ。と私は思った。日に一度じゃないか。何が四～五回替えるだと。

「オバアの体、拭いてあげてる？」と保健婦さんが聞く。

「はい一日に一度、夕方に。」

——このうそつき。またうそをついて。私の体は先生や保健婦さんが見れば一目瞭然さ。黒い垢がたまり、この青黒い褥瘡を見れば、シゲの言っている事が、まっかなウソだと解るはずだ。

「重いでしょう。どんなに瘦せていても。大人だし、自分で動くことができないから。」

「ええ重いけど、毎日向きを変えたり、体を拭いたりしてあげてます。何しろ大事な年寄りですから…。」

——何が大事な年寄りだ。一日に一度でいいから体の向きを変えて欲しいと、ずっとと思いつづけているのに。この体の傷をみれば、シゲお前がついているウソは全部先生に解るんだぞ。

「オバアの意識はある？ 確かかい？」

「いいえボケてるみたいですね。痴呆症というんですか。何を言つても答えませんし、ずっとこのままです。笑うこともありません。」